
流星のロックマン～赤き太陽現る～

evance

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン〜赤き太陽現る〜

【Nコード】

N4779X

【作者名】

evance

【あらすじ】

メテオGの危機がさりスバルたちは6年生に進級しようとしていたそんな中ヒールヴィザードによる事件が多発していたそれが4度目の地球の危機になることはだれも予想していなかった

第一話 因縁（前書き）

はじめまして 初めての投稿です がんばっていきます。

第一話 因縁

ここは紅葉島もみじとうの砂浜 そこに一人の青年と一人の少年がはなしていた
「お前にはコダマ小学校へ転校してもらおう」

彼の名は暁シドウ WAXAで働いており、ヴィザードのアシッド
と電波変換することでアシッド・エースになることができる

「ん？コダマ小だって？」

髪は銀色 服は白いえりのついたシャツ 黒い短パンという容姿の
少年が言った

「知ってるのあか？」

「・・・なあ あんた星河スバルってしってるか？」

「なに！どうしてロックマンの正体をしっている！？」

「へー あいつが・・・ まっ不思議はないか」

少年はつぶやくと海のほうを向き

「やっぱり因縁が俺たちを引き寄せたな・・・スバル」

第一話 因縁（後書き）

なぞの少年 こいつの正体がわかるのはだいぶあとですね

第2話 始まりの朝（前書き）

この物語の設定はゲーム流星のロックマン3のあとといつことになっています

第2話 始まりの朝

「最近 ヒールヴィザードの事件が増えているね」

食事を終え ニュースを見ながらそういったのは星河スバル 現在
コダマ小に通っており今日で6年生になる

「へっ 最近つまんないからな 肩ならしにはちょうどいいぜ」

そう言ったのはスバルのヴィザードのウォーロック 元々は星人で
地球に逃亡していたのだが今ではすっかりなじんでいる

「ロック 物騒なこといわないでよ また地球の危機なんかおこっ
たらどうすんのさ」

彼らは電波変換することで地球を3度救ったロックマンになれる

「スバルー 委員長さんたちきたわよー」

「はい 行ってきたーす」

「ふふ 今日 帰ってきたらスバルどんな顔するかしら♪」

第2話 始まりの朝（後書き）

読みにくいので空白あけました

第3話 6年生と一年（前書き）

なるべくペースをおとさないで書きたいですね

第3話 6年生と一年

「みんな おはよう！」

「おはようスバル君 今日寝坊しなかったようね」

「おはようございますスバル君ほんと珍しいですね寝坊しないなんて雨でも降るんじゃないですか」

「おつすスバル！ちゃんと朝飯くったのか？」

上から順に白金ルナ 最小院キザマロ 牛島ゴン太 彼らはスバルが学校へ通い始めたころのなごりか

毎朝スバルを迎えにいつているスバルのブラザーである

「みんな・・・僕ってそんなに寝坊してる？」

「してるわよ 自分のことよくわかってないのね ほらみんないくわよ」

3人は意気揚々とスバルはうなだれながら歩きだした

「ねーロック 僕ってそんなに寝坊してる？」

「してるな」

「・・・今日から6年生なのに・・・6年生か・・・ロック僕たちが出会ってから一年がたとうとしてるよ」

「・・・一年か いろいろあったな」

「うん」

一年前の自分だったらこんなふうにブラザーたちと学校に通っているなんて考えもしなかっただろう

僕は感謝した ロック 目の前の3人のブラザー そして初めてのブラザーにも

第3話 6年生と一年（後書き）

メテオっていつごろおきたのでしょうね
すくなくとも夏休みあけだ
から秋ぐらいですかね

第4話 始業式は眠気をさそう(前書き)

読んだかたできれば感想よせてください
参考にしたいので

第4話 始業式は眠気をさそう

「そういえば今日転校生がくるそうですよ」

教室にはいるとキザマロが言った

「転校生？ どんな子がくるのなかしら」

「牛丼すきだといいな」

「ゴン太は牛丼がからんでればなんでもいいの？」

そんなことを話していると育田先生がきた

「おーい始業式あるからみんなならべー」

「先生！ 転校生は！？」

「はは もう伝わってるのか紹介はあとだいくぞー」

そうして始業式をおえるとクラスは転校生はどんな子かはなしていた

僕は始業式の校長先生のはなが長かったせいで眠く視界がぼやけている

「みんなー 静かにしろー」

先生がはいるとみな静かになった

「みんな知つてるとおもうがこのクラスに転校生がくることになったぞーなんと4人もだ！ そのうち2人は復学だが」

その言葉にみながまさかという顔をした

「スバル 大変だ！ハープの周波数がする！」

「え？まさか・・・」

「4人とも はいってこい」

先生がそついうとドアがひらいた

第4話 始業式は眠気をさそう（後書き）

転校生の4人だいたいわかりますよね
一人は名前だいていませんが

第5話 眠気をふきとばす転校生たち（前書き）

ここからですよある意味

第5話 眠気をふきとばす転校生たち

入ってきた4人をみて僕はいつきに吹き飛んだ

「みんな元気にしてた？ 双葉ツカサです」

彼は以前もう一人の人格ヒカルを封印するため旅にでていた少年だ前にナンスカー村で会ったがそれ以来あっていなかった

「ジャックだ 久しぶりだなおまえら」

彼は元ディーラーの一員で一度メテオGから帰ってきたことを祝してパーティーをしたとき以来あっていなかった

「はじめましてベイサイドシティーからきました響ミソラです」

彼女は僕の初めてのブラザーでヴィザードのハープと電波変換することでハープノートになれる 2度ブラザーをきったが今では大切なブラザーの一人だった 彼女は人気歌手で仕事がいそがしくここ2ヶ月あっていなかった

「あゝはじめまして神上シンだ よろしく」

髪は銀 それと対称的な黒い目 白いシャツと黒い短パンの彼をみたとき目をみはった

そして彼は僕に不敵な笑みをみせた

「わーーーー！ ミソラちゃんだ！！」

「あのアイドルがこんな近くに!!」

「おかえり〜 ツカサ君 ジャック」

「あの人すごくかつこいいー!」

クラスのみなはそれぞれの反応をみせていた

「それじゃ 席だがみんなどこがいい?」

第5話 眠気をふきとばす転校生たち（後書き）

4人めの転校生の名前・ ・ ちよつとセンスないかな

第6話 席はどこ（前書き）

今日 すこしががんばります

第6話 席はどこ

その瞬間クラス全員（スバルを除く）の目がひかった

「ミソラちゃんどうぞこちらへ！」

「いや 俺の隣へ！」

「ぼくのところへきてください！」

しかしその争いは一瞬にして止んだ

「私 スバル君の隣で」

「「「なにいい！」「」「」

「わかった ほかの3人はどうする？」

「ぼくはどこでもいいですよ」

「俺もどこでもいいぜ」

「同じく」

席は次のとおりになった

先生

男 キ 女 ゴ

ス・・・スバル

ミ・・・ミソラ

ジ 委 男 女

ゴ・・・ゴン太

ツ・・・ツカサ

女 男 女 シ

キ・・・キザマロ

ジ・・・ジャック

ツ ミ ス

委・・・委員長

シ・・・神上シン

「よろしくねスバル君」

「あっうんよろしく」

おその瞬間 転校生を除いた男子＋委員長からものすごい殺気は
つせられた

「（おのれスバルめ）」

「（名前で呼ばれてた!）」

「（いったいどんな関係なんだ!?）」

委員長からあは黒いオーラがみえている

「なんかみんなこわい・・・」

ミソラ視点

「（やったースバル君の隣だ〜）」

「よかったわね ミソラ」

「（うん！）」

「けど彼 難しい顔してるわね・・・」

「（うん 確かに前のほうじつと見てるけど・・・）」

スバルの前のほうをみてみると女の子がうれしそうに神上シンに学校の説明をしてた

「うん まっ いつか」

「よし みんなゝ宿題だせー」

第6話 席はどこ（後書き）

しばらくほのぼのですね

第7話 宿題（前書き）

今日で2話目です

第7話 宿題

ミソラはたのしかった 知り合いに囲まれながら学校をすごすのが

「ゴン太 本当に宿題をやったが家にわすれてきたんだな？」

「ほっ本当だぜ」

「じゃあ明日もってこれるな？」

「おっおう」

「やっていなかったら学校にのこってやってもらっぞっ」

「そっそんな!!」

あははははは

楽しいと心のそこからおもえた

そして隣ではスバルがほえんでいる

今日から毎日がたのしみだな

～授業終了後～

「久しぶりねミソラちゃん ツカサくん ジャック」

「ほんと久しぶりだなおまえら」

「元気だった？」

「ひさしぶりだねみんな」

「いろいろ話したいことはあるんだけど　まずミソラちゃんなぜスバル君の隣をえらんだのかしら」

黒いオーラをだしながらたずねた

スバル達（ミソラを除く）は思わず一歩さがった

「隣に友達がいたほうがいいから」

「私の隣でもいいんじゃない？」

「ブラザーのスバル君がよかったの」

「「なに！！！」」

教室のほとんどの人間がはんのうした

「おいスバル！　どういうことだ！」

「そーだ！　ミソラちゃんとブラザーってどういうことだよ！」

「えっえーと色々あつて・・・」

「色々つてなんだ！　説明しろ！」

「うるさいわよ！あんたたち！！」

その声でみんな静かになった

「えっえーとツカサくんとジャックがかえってきたってことはそれ
その問題が解決したんだよね？」

第7話 宿題（後書き）

おれの学校ライフもたいへんだ

第8話 それぞれの事情（前書き）

第7話の題名と更新がくれたこと
すみませんでした 学校がいそがしくて・・・

第8話 それぞれの事情

「うん 僕はヒカルを封印するんじゃなくて和解することにしたんだ ヴィザード オン」

そついうとなんとふたご座のFM星人ジェミニがでてきた

「「「ジェミニー!」「」」

「いや中身はヒカルだよ 僕にジェミニの残留電波があつたみたいでこうなつたんだ」

「じゃあジェミニってよべばいいのか ヒカルってよんだほうがいいのか?」

「どっちでもいい まさかこうなるとわな・・・」

「プロロツ よろしくなジェミニ」

「よろしくねツカサくん」

上から順にロック ジェミニ（ヒカル） オックス ハーブが言った

「俺もいるぜ ひさしぶりだなロックちゃん」

「「「コーヴァス!」「」」

なんと倒されたはずのからす座のFM星人コーヴァスもでてきた

「ジャックどういうこと？」

「俺は今WAXAにいて復元してもらったんだ　そして暁のやつに学校には通えっっていわれてな」

「へ」

「そういえばミソラちゃん学校にかよってていいの？　歌手は？」

「私ね中学卒業まで芸能活動中止するの」

「「「ええー！ー！！」」」

「だから私　学校に通うならみんなのいるここがいいなと思って」

「なるほど」

すると先生がはいってきた

「みんな　席につけ　１年間の行事のデータおくるからな」

その間もスバルはどこかそわそわしているようにみえた

第8話 それぞれの事情（後書き）

けれど学校の行事もおわったからけっこつ更新できますよ

第9話 用事（前書き）

しばらくミニソラ視点つづきます

第9話 用事

今日は学校初日なのでお昼でおわった

〈ミソラ視点〉

「スバル君 この後屋上にきてくれないかな？」

「ごめん 僕用事あるから」

そういうとスバルはそそくさと教室をでていった

「・・・怪しい 今日のスバル君なんかそわそわしてた」

「ほかの誰かから告白かしら」

ハープが唐突に言った

「そつ それは困るよ 追いかけてよう」

そういうと女子トイレにかけこんだ

「トランスコード ハープ・ノート！」

〈ルナ視点〉

「あらスバル君は？」

「スバル君なら用事があるってさっきでていったよ」

「・・・ミソラちゃんは？」

「さっき教室を急いででていったぜ」

「しょうがないわね・・・もう一人の転校生は？」

「終わった瞬間どっかいました」

「なんなのよ！ もう！ スバル君の居場所は！！」

「えーと「ブロッツ ロックなら校門付近にいるぞ」

上から順にツカサ ジャック キザマロ ゴン太^{オックス}がルナの質問にこたえた

「追いかけるわよ」

みんなルナからでている黒いオーラにおびえて黙ってしたがった

第9話 用事（後書き）

次回 オリジナル設定でます

第10話 コダマ山（前書き）

学祭つかれたゝ 足いてゝ

第10話 コダマ山

ミソラ視点

ミソラはスバルをみつけるとウェーブロードの上でスバルを追いかけた

すると校門にたっている神上シンがみえスバルは神上シンにちかづいた

お互いなにも話さずただ目をあわせると一緒に歩きだした

「あれ？ あの二人知り合いなのかな？」

「けどあの子 転校生でしょ？」

「うーん とりあえず追いかけてみよう」

「よかったわね 告白じゃなくて」

「もう！ ハープ！！」

その後もスバル達はなにも話さずただ一緒に歩いていた

「どこ行くんだろう この方向スバル君のおうちじゃないし展望台でもない ハープどう思う？」

「さ〜」

するとスバル達はなんと山のなかへはいつてしまった

「あら？　ここウェーブロードつながっていないわ」

「山のなかに入りちゃった・・　歩いておいかけよう」

そういうとハープ・ノートはウェーブロードからおりてあるきだした

（ルナ視点）

「ゴン太こっちであっているのよね」

「えっと・・」ブロロ　そうだぜ」

ゴン太のかわりにオックスがこたえた

「ブロロ　この奥だ」

「ここって・・・コダマ山じゃない！」

「どうした委員長」

「コダマ山は地元の間人なら絶対はいらないところなんです　みんな道に迷っておりるのに3日はかかるっていいいますから」

キザマロがいった

「？ただの山だろ 普通におりればいいだけだろ」

「私も知らないわよ！」

「じゃあ何で地元のスバルが入ってるんだよ」

「ブロロ なんかロックのほかにハープともうひとつ周波数をかんじるきがする・・・」

「なんですって！ スバル君とミソラちゃんが一緒ですって！！」

委員長はオックスの後半のはなしをきいていなかった

彼女にとって重要なのはスバルとミソラが一緒にいるということだ

「こんなところでなにしてるんだろ？」

「追いかけるわよ」

「えっ でも委員長ここはコダマ山で・・・」

「おだまり！！ だまってついてきなさい！！」

第10話 コダマ山（後書き）

主人公が一言もはなしていない！！

第11話 転校生は何者？（前書き）

学祭 足いたいけどたのしかったな
時間もどせないかな

第11話 転校生は何者？

「さつきから平坦な所がつづいててどこから来たのかもわからないのにあの二人よく迷わず進んでいるね」

「しかもここ電波環境わるくて周波数を感じとれないわ スバル君を見失ったらアウトよ気をつけてミソラ」

しばらく登ると少しひらけた所がみえてきた そしてその中央に一本のおおきな木があった

二人はバッグをその木のそばに置くとやっと話し始めた

「おしっ 始めるか」

「うん・・・」

ミソラは電波変換をとくと近くの木に隠れた

「なにが始まるんだろう？」

「さあー？」

そして二人はいきなり喧嘩を始めた

「えっ何で何で！？ けんかが始まちゃったよ！ スバル君大丈夫かな！？」

「落ち着きなさいミソラ よく見なさい二人ともパンチとかしてる

けどどっちもあたってないわ」

「えっ？」

よく見ると確かに動きがはやくて（人間の範囲で）わかりにくいけど
どっちも攻撃があたっていなかった

左右に動き攻撃をくりだすあたらなければ相手の攻撃をガードする
攻撃方法もさまざまだった ふところに潜りこんで間近から攻撃し
たり 立ち回り真横からひじをつきだす等いろいろあった

「なんか・・・かつこいい・・・」

ミソラは二人のかんせいされた動きに見入っていた

だが戦いは長く続かなかった

スバルが腕を前にだしたとき神上シンに引っ張られしりもちをついた

そこに神上シンの右ストレートがはいる

「あっ！」

だが攻撃はあたらなかった 神上シンは顔にあたる寸前でとめてい
たからだ

神上シンはニツと笑うとスバルに手をさしだした スバルも微笑み
ながらその手をつかんだ

「久しぶりだなー！ スバルー！」

「久しぶりー！ シンー！」

・・・えっ？

第11話 転校生は何者？（後書き）

スバル君キャラ崩壊（恋愛ではなく）ごめんなさい
けど・・・やっとおもしろくなってきた！

第12話 その正体は（前書き）

だいたい予想がつくというかた多いと思います

第12話 その正体は

ちよつと待つて ついさつきまでけんかしてたのに

理由わかんないけどけんかしてたよね

「そうだブラザー 結ぼうぜ」

「うん いいよ」

ちよつと待つて 私とブラザー 結んだとき私泣いたよ

そんな軽くていいの

「ところでさスバル聞きたいことがあるんだが さつきから木の後に隠れてるやつだれだかわかるか？」

「えっ」

「ミソラだな ハープの周波数がする」

「・・・ミソラちゃん？」

ミソラは隠れても仕方ないとおもい素直にでてきた

「・・・はい」

「どづしてここに？」

「スバル君がどこいくのか気になってついてきました・・・」

「この子だね？」

「えっ！？ 知らないの！」

「はじめまして響ミソラです スバル君の初めてのブラザーです」

「へへ 君が・・・」

「あのへ スバル君とはどういう関係なの？」

そう尋ねるとシンはニツと笑ってこういった

「はじめましてスバルの幼馴染の神上シンです」

「ええー！ー！ スバル君の幼馴染！？」

ミソラは腹のそこから驚いた

「でもなんで二人ともけんかしてたの？」

ミソラがそう質問するとスバルが話し始めた

「それはね僕たちが小学１年生のころ・・・今から５年前くらいになるかな」

第12話 その正体は（後書き）

次回 スバルとシンの過去があきらかに！

第13話 二人の過去（前書き）

結構時間があくと思っ たんですが
なかなかうまくいきませんね・・・

第13話 二人の過去

二人が始めて出会ったのは小学校にあがる前・・・5歳のときだった

神上シンもコダマタウンに住んでいて二人は公園で出会った

「なにしてるの？」

最初に話しかけたのはシンからだった

「えっと・・・お城つくってんだ君なまえは？」

「僕 神上シン きみは？」

「星河スバル！ 一緒にお城つくらない？」

「うん！」

それから彼らは毎日のようにあそびコダマ山をかけまわった

やんちゃ二人組みとしてもコダマタウンではよくしられていた

だが小学1年生の春のおわり

神上シンはコダマタウンから引越しをしなくてはならなくなった

引越しの前日かれらはコダマ山の頂上にある大きな木のしたにいた

「・・・僕 引越しするんだって」

「・・・うん」

「・・・島に行くんだって」

「・・・もう会えないの？」

「・・・」

「・・・」

二人とも黙ってしまった

離れたくないとおもっているのは二人とも同じだった

だがこれは逆らいようのないことだった

バシッ

シンはいきなりスバルをなぐった

「！　なにすんのさ！」

二人はけんかをはじめた

二人とも野山を駆け巡ったせいか自然と体をきたえており本当に6歳かと思うけんかだった

スバルがシンの顔をなぐったあとシンがさけんだ

「引き分けだ！」

「え？」

「このけんかは引き分けだ！」

スバルは手をとめ話をきいていた

「僕たちのけんかは引き分けだ！ だからまたけんかをしてどっちが勝つか決めなくちゃいけない！ だから絶対会わなくちゃいけないんだ！ このけんかはまた僕たちを引き合わせるんだ！」

「！ うん！！」

そうして二人はわかれた

その後星河大吾がブラザーバンドを開発

1年後宇宙人と絆を結ぶため宇宙へいった

だが大吾は行方不明になり今に至る

第13話 二人の過去（後書き）

シンが因縁がどうのこうの言ってたのはこういう理由でした

第14話 赤いヴィザード（前書き）

だれかー！ 感想を！

第14話 赤いヴィザード

「っというわけなんだ」

「へーそうなんだ だからけんかしてたんだ すごいね！本当に二人とも会ったんだから！」

「まあな 因縁が俺たちを引き寄せたのさ」

「だからこの木の下でけんかしてたんだ なんかロマンチックだね」

「ハハ ありがとうミソラちゃん」

「さて久しぶりにのぼってみるか よっと」

そついうとシンは木に登っていった

よくみると木にはハシゴがついていて上のほうにはちょっとした足場もあった

「僕も登ろ！」

「え？ 待つてよ」

木を登るとそこから今までとは違う景色がみえた

「うわ~~~~ す~~~~い」

そこから見える景色はコダマタウンを一望できる場所だった

「懐かしい景色だ・・・」

「うん 僕もロックと出会う前はここにも結構きてたけど最近はずっときてなかったな」

「ロック？」

「俺のことだぜ」

そついうとロックが勝手にでてきた

「わっ 勝手に出てきちゃだめだよロック」

「そんなことよりも・・・お前から懐かしい周波数を感じてるんだが」

「あら ロックも気づいてたの？」

そついうとハープもでてきた

「あ ハープ」

「へーこいつらがお前らのヴィザードか元宇宙人の」

「「「「えっ？」「」「」」」

二人と二体は耳を疑った

「なっなんで知ってんの!？」

「てめー何者だ！」

「これを見ればわかるよ ヴィザード オン」

「ふふ 久しぶりですね ウォーロック ハープ」

その声がすると赤く刀を腰にさしたヴィザードがあらわれた

「「オリオン！？」」

第14話 赤いヴィザード（後書き）

次回 赤いヴィザードの正体があきらかに・・・なる？

第15話 そのわけは？（前書き）

今日で二話目でーす

第15話 そのわけは？

「あなたどこ行ってたのよ！」

「どこ行ってたってどういう意味だハーブ」

ロックがハーブに質問した

「こいつ私たちと一緒にあなたを捕まえるため地球に来たけど途中でいなくなったのよ もう死んだかと思ったわ」

「実は・・・」

「あゝ待て待て」

オリオンが今まさに話そうとしたところをシンがさえぎった

「その話はまた今度にしよう 何度も話すのはめんどうだからな」

「そっそっですか・・・」

「・・・そういえばこの子みたことあるな」

シンはミソラのことをいつている

「思い出した！ 確か俺と同じで転校してきた子だ」

「そっち!？」

「違うの？ うゝん」

「・・・いまだきミソラちゃんを知らないなんて」

「スバル君も最初会ったとき私のこと知らなかったけどね」

「うっ・・・ごめんなさい」

「まあだからブラザーになれたと思ってるけどね」

その間もシンは悩み続けていた

「うゝん 響ミソラ・・・あつこの前ラジオで好きなタイプはあつさ

「あー！ー！言っちゃだめ！ー！」

ミソラはシンの話をさえぎった

「？ なんの話？」

「スバル君はしらなくていいから！ そっそれよりも早く帰ろうよ」

「それもそうだね帰ろうか」

そうして3人は山をおりていった

第15話 そのわけは？（後書き）

神上シンの性格は基本めんどくさがりでおおざっぱ けど重要なときはたまにまじめになる

ミソラが好きなタイプ それはアニメではあっさり系だそうです

次回 忘れかけているあいつらがちょっとだけでてくる！

第16話 迷い人（前書き）

ちよつとではなくおもいつきりでした

第16話 迷い人

「二人ともよく迷わないで進めるね 私登るとき二人についていかなかったら迷ってたよ」

3人は今コダマ山をおりている

「まあね 小さいころよくここで遊んでいたから」

「けどここコダマ山は本当は一度入ったらなかなか出られない迷いの森として有名なんだぜ」

「へへ 何で迷わず進めるの？」

「それは「もう！ここどこよ！」あれ？」

なにやら前方から聞きなれた声がしてきた

「知るかよ！だいたいなんでお前らがわかんねーんだよ！地元だろ！」

「ここは危険だから入るなって小さいころからいわれてきたんだからわかるわけないでしょ！」

「平坦なところが続いていてどっちが上なのかわかりませんし 同じようにところが続いていてどっちからきたのかもわかりません・・・」

「無事帰れる確立・・・7%！」

「上を見上げて木が生い茂っていてどっちが頂上かもわからないね」

「ブロロ 電波環境も悪いからロツクたちの居場所もわからん」

「おまけにどこかけても電話つながらない・腹減った」

上から順にジャック ルナ キザマロ ペディア ツカサ オツク
ス ゴン太の声が聞こえた

「「「「「完全に道に迷った」「」「」「」」」」」

「みんな何してるの？」

第16話 迷い人（後書き）

今日で3話目です

暇なのかって？ひまだよ～～今日だけ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4779x/>

流星のロックマン～赤き太陽現る～

2011年10月29日11時05分発行